

小樽雪あかりの路 10 周年記念観光まちづくりシンポジウム

知恵を活かした観光地域づくり

しりべし i ネットシンポジウム

平成 20 年 2 月 16 日 (土) 16:00 ~ 18:30

第一部 (パネルディスカッション)

~ 雪国の寒さを暖かさに変える、マイナスをプラスに変える
知恵を活かした観光地域づくり ~

第二部 (鼎談)

~ 「雪国の寒さをプラスに変える、
マイナスをプラスに変える知恵を活かした観光地づくり」 ~

【パネルディスカッション】

甲斐 賢一氏 (別府温泉ホテル風月代表取締役・やまがた観光アドバイザー
ようこそ J A P A N 大使)

志田 直木氏 (山形県月山志津温泉・雪旅籠の灯り実行委員会)

柿崎 雄一氏 (山形県大蔵村観光協会誘客委員会)

押切 珠喜氏 (山形県赤倉温泉・最上まちづくり株式会社)

蘇斌 (スピン) 氏 (雪あかりの路・中国学生ボランティア) 他 5 名 通訳: 斉藤明
子氏

キム・ナヨン氏 (" ・韓国学生ボランティア) 他 4 名 通訳: 百貫香美氏

【鼎談者】

本保 芳明氏 (国土交通省 内閣官房 総合観光政策審議官)

桑野 泉氏 (株式会社 玉の湯代表取締役社長・由布院温泉観光協会会長)

甲斐 賢一氏 (別府温泉ホテル風月代表取締役・やまがた観光アドバイザー
YOKOSO J A P A N 大使)

【コーディネーター】

川口 直木氏 (企画プロデューサー)

主催: 小樽雪あかりの路実行委員会、後志観光連盟
有限責任中間法人しりべしツーリズムサポート
後援: 北海道運輸局・小樽開発建設部・後志支庁・小樽市

第1部パネルディスカッション

「マイナスをプラスにする観光地域づくりの輪を日本中に、世界中に！！」



【川口】皆さん、こんにちは。わたくし川

口といいまして色々シンポジウムに出させて頂いてコーディネートしているのですが、こういう会場は初めてでありまして私の後頭部の方には偉い人がいるし、周りとか囲まれて何を話したらよいのかと過酷な状況で、しかも出演者の方が飛行機の都合でおみえになっていない。

もう一つこのシンポジウムで普通のシンポジウムとちょっと違いますのは、この会場に入った瞬間になんとかお酒のいい香りが香ってきまして、主催は役所ではないですよ？市長。役所がこんなことしたら大変なことになっちゃいますよね。

民間ならではのシンポジウムだと思います。

元々、シンポジウムという語源はシンポジオンといいまして、お酒を飲みながら、とにかく色々なことを、思ったことを話し合おうよというのがシンポジオンの語源ですから正にぴったりな演出だな～と感心しております。ちなみに冒頭ご紹介ありましたが、山形県の方が3人、此処にいらっしゃいます。

皆様がお飲みになっているワイン、このホットワインはヴァンショー（ホットワインのこと）といいますが、このホットワイン、実は山形県と小樽の大変なコラボレーションです。

山形県の上山「タケダワイナリー」の岸平典子さんという一生懸命作っている素晴らしい作り手の方がいらっしゃるのですが、この岸平典子さんが、このホットワインというのは色々なものを、ただワインを熱燗にすればよいというものじゃないんですよ、色々なフレーバーを入れて美味しくする、いい香りにするんですね。この上山「タケダワイナリー」さんが考えたレシピ、これを北海道ワインさんのワインで作ってみたということで、今回のシンポジウムにぴったりなコラボレーション、共同謀議というか、企画というか、したがって今日、これ、美味しいな～と思ったらレシピは事務局へ聞いて頂ければこの美味しいワインがお家でも出せるわけで。山形と小樽のコラボレーションのお酒を片手にしながら、気楽に話すシンポジウムということをやりたいと思います。

パネルディスカッションといたって議論なんかするわけじゃなくて、パネルディスカッションって議論するんですけども今日はこの調子じゃ皆そうだよ～って仲良くするような会になりそうなんです、皆で手を繋ごう！という主旨で進めていきたいと

思います。

それでは早速、お一人目から始めたいと思うのですが、すいません。皆さん、失礼、先ほど司会の方がご紹介頂かなかったということで韓国チームの通訳をやっていただきます、百貴さん。それから中国チームの通訳をやっていただいている斎藤さんです。中国チームは全員、赤を着ているのは約束したのですか？中国はやはり赤はおめでたいですか？

【中国通訳・斎藤】春節という古いお正月がありまして、中国チームはお正月気分に参加しております。

【川口】韓国チームはユニフォームが揃っていないのはどうしてなんですか？皆、洋服がバラバラじゃない？

【韓国通訳・百貴】でも皆、心が一つ

【川口】韓国の人、洋服は違うけど心は一つよ。上手くまとめたよ。中国、負けちゃうよ。中国の人は心が一つ、韓国の人、心が熱い。逆さまか！（笑）

【川口】^{がっさん}月山というのは皆さん、ご存知だと思うのですが、これは大変雪深い大変な山なんですね。その中腹というか、先ほど聞いたら今日で6m、5mちょっと、そういうところで雪に負けず、頑張ってる月山志津温泉。志田さんにまずはちょっとご紹介をね、月山志津温泉はこんなことやって雪を克服しているんだと、こらへんを紹介してください。



【志田】皆さん、こんにちは。山形県の月山志

津温泉から来ました志田と申します。よろしくお願い致します。

志津温泉というのは山形県の真中にあります。月山という山がありまして、こちらは7月下旬までスキーが楽しめる場所になっています。その所から私達は来たんですけども、一昨日、昨日と1日で50cmほど積もりまして、ちょうど今、5m50センチくらいに積雪なっています。毎年、6m50センチくらい最高積雪を観測しております。四季の変化が山形県内でも最も激しい地域だと思います。春も、夏も、秋も、冬も、それぞれに良さがあるんですけども、どうしても冬は雪が多すぎて、昔からお客様も住んでる私達も良いイメージがないというか、暗いイメージがありました。冬は嫌で、雪かきも嫌で、早く春になって欲しいという気持ちで今まで過ごしていたと思います。でも、どうせ過ごすんなら冬も楽しみを見つけなければいけないと思ひまして、よく考えました。よく考えた結果、毎年、目の前に雪が5mも6mも積もります。じゃー、

これは何かに使ってみようと思ひまして、ちょうど私達の志津温泉というのは月山の信仰に来る方々の宿場町でもありましたので、それを雪を使って、雪の旅籠^{はたご}、宿を作ってみようと思うことになりまして、3年前から雪旅籠の灯りを開催することになりました。これ、見て頂くとわかるんですけど、全て、雪でできています。

一つ、ちょっと特徴的なのは、この雪というのはどこからも運ぶものでもなく、そのまま積もった雪を利用して、ちょこっと、くり抜いただけで家を作ることができるんです。ですので中に入ってくださいと、多い雪の時や色々な雪の質があるんですが、雪の層というものを見ていただける楽しみがあります。

【川口】志田さん、それってさ、その旅籠宿は積もってるやつをくり抜いて、積み重ねて旅籠を作っていくわけね？

【志田】入り口と格子の部分をくり抜くだけで旅籠が作れます。

この旅籠をやるようになってから冬の楽しみが増えたということで、まず此処に住んでいる志津の皆さんが元気になりました。その楽しさをお客様にも知って頂きたいとイベントとして開催することになったのです。

今年は、ちょうど、あと1週間後の2/22から開催予定です。まだまだこれから雪が降って旅籠の雪をよける作業もありますので大変だと思うのですが、我々はこの小樽に来て、イベントのノウハウをみつけて、勉強して何か一つでも役立てることが出来ないかと思ひまして小樽へ来ました。どうぞ宜しくお願いします。

【川口】それは小樽は雪あかりの路する時、最初は雪は少なかったですね？

キムさん、最初からこの今回の雪あかりをやっているんですか？



【韓国・キム】私は今年、3年目です。雪

はだんだん少なくなっている。3年前に初めて来たときにも驚いたんですけど、韓国は雪が降らないし、今の状態でもビックリしています。



【柿崎】山形県大蔵村肘折温泉というところ

ろから参りました柿崎といいます。

志田さんの月山の反対側、標高300mしかないんですけど、志田さんの所の1mマイナスくらいの雪です。なんで肘折温泉かと申しますと、昔、老僧が崖から落ちてまして肘を治したのが肘折温泉だという伝説といわれておりまして、ちょうど去年、1200年を迎えたという古い温泉です。

出羽三山の山岳信仰と結びついていて、「さんげさんげ」、地元の者が行者になりましたして、白装束で行者になる行事をいまだに催しています。

冬の間は月山、志津ほどではありませんが、雪がいっぱい降りますのでこういう形で25mくらいの雪だるまを作りまして、1,000人、1,500人くらい集めるスキー大会を催したり、3mくらいある雪の壁に穴を開けまして、4キロ強の雪回廊を作ります。高さ、25m、体重25万t、体重は換算するだけですけども、てっぺんが高さ25m。今年で11年目になりますが、最初の年はギネスに載りました。29,41m。

じつはスキー大会をやるのに駐車場を整備する必要がありまして、雪を寄せて駐車場を作るんですけども、ただただ雪を寄せているのは面白くないと地元の建設業界の方が言い出しまして、雪をはね集めたら、でかい雪だるまが出来るんじゃないかということから始まりました。普通に作ったら面白くないということで30m近いものになりました。肩にユンボが乗って成型するわけです。なんで、こういう形にしかなりようがないんです。冬の間こういうことをやりまして。

肘折温泉、県内のお客様が75%くらいの湯治場です。湯治のお客様を中心。

朝市が5時半くらいからありまして、お爺ちゃん、お婆ちゃんばかりなので極端に朝型で県内の客様が中心の肘折温泉。極端に夏型の温泉場でした。

冬にこういうイベントをやりますし、高校生のスキー大会、冬のスキー大会を中心とした雪のイベントを企画いたしました。

去年から芸術工科大学さんとタイアップ致しまして、肘折の温泉街に灯籠を灯しましておいでいただくような仕組みを考えました。じつは簡単に見えるんですけども、灯籠のデザインを建築デザイン科の竹内先生の協力を頂いて、23基、肘折の中に灯させていただきました。描いてる和紙は月山の和紙。

今年は日本画でなく、洋画、しかも版画の若い作家さんたちと肘折がつながることで、湯治の文化ですとか、出羽三山の歴史を新しい作家さんのデザインでレベルアップ、新しい形を考えています。



【中国・スピン】じつは私は「深圳」で広

東省ですから南の方です。今回、冬は初めてです。25mとはちょっと想像できない。

ああいう大きな雪だるまは私達には作れない。やってみたい。今度、募集したら是非、行ってみたいです。

【川口】雪ってどうしても邪魔なもので、片付けるもの。それを使ってなにかできないか？なにか面白いことできないか？のが最初にあって、中に何かを入れるんじゃないか、本物の雪でどこまででっかく出来るかとか、馬鹿なこと考えたおじさん達がいて、そのとおりやっちゃったということだと思います。

あまりにも多いんでやけばちになっちゃったってことだよな！（笑）

【川口】山形県の最上町といって山形県の北の方、押切さん。

1月シンポジウムがあって押切さんの赤倉温泉で視界ゼロのシンポジウムってのも初めてでしたね。赤倉温泉のシンポジウムも良かったですよ。



【押切】もうすでにお気づきの方もいると

と思いますが、僕だけ奇妙な山形弁で喋ってますけど、ポスターも準備もないのは赤倉温泉が日本一貧乏な温泉街というのではなしに、急遽、パネラーにして頂いたので、何の準備もしていなかったというのが正直なところです。

大阪から引っ越してきて、赤倉温泉という山形県の雪が2m、3m積もるところに住んでいます。自然にあこがれて引っ越してきたんですけども、いざ引っ越してみると地域の方々はこの雪が嫌で嫌でしょうがないと、なにゆえ、お前はこんな所へ引っ越してきたんだと言われるんですけども、ちゃんとスキー場を作って金儲けしていると、そのくせスキー場でイベントして雪が少ない多いと嘆いたり、喜んだりしながら。土とか石とかをスコップでよけるとしんどいんですけども、雪ってのは働いた分だけ移動できるんですよ。そんなに重たくないんで自分の労働力ってこんなにあったのかなと嬉しくなってしまう。やりがいがあるというか、面白さがある。

じゃ～今度、そういう雪を楽しんでスキー場、夏場になったらどないすんだという雪のないスキー場をどないするんか、お金のあるときならグラススキーとか、展望台まで夏でもリフト動かしましょうや、ということをするんですけども今、そういうことやってもなかなか経済的に成立せいへんということで放ったらかしされておったんですけども、よくある話し、地域の人たちが集まってお酒飲むとスキー場の上の方に露天風呂でも作ったら面白いとちがうのんと話しているんですけども、得てして、お酒を飲んでるときは面白いんですけども、酒が醒めた時は二日酔いと一緒で、馬鹿なことをいってるんだ、となるんですけども、夏場はそこに露天風呂を設えまして、そこでスキー場の上の方から町中を眺望しながら温泉に入る。

【川口】スキー場のゲレンデに温泉を作った？

【押切】湯船を設えて温泉に入る設備を作ったってことです。

でもそこに温泉が沸くわけではないので、自分達で共同浴場の源泉から4トン、四輪駆動のトラックに載せて露天風呂まで運んで、かけ流しをやりたいんでもう1台のトラックで運んで自然効果を利用して夏場はスキー場で温泉に入るということをやっております。それで、お客さんが増える効果があったか？というところさっぱり解りません。ですけど、そのようなあほなことやっていると色々なマスコミの方々が取材に来てくれます。ですからテレビコマーシャルとか新聞のメディアの宣伝を使うと結構なお金が掛かるんですけど、そういうことするとソウタイ効果が大きくて、テレビの番組に出させて頂いたり、雑誌や新聞社さんの取材を受けてますので、自分達も遊びながらやって、それをメディアさんを通じて放送とかされて、じわじわと赤倉温泉の名前が浸透してくれたら・・・と思っている次第です。

【甲斐】何故、別府と山形かと皆さん思うと思いますが、山形県の観光アドバイザーをしておりまして、そこでここに山形の若い人がいっぱいおりますけど非常に元気です。山形県全体でメーリングリストを作って、皆で活性化していますから要は活性化できるので、一昨年行ったときより、だいぶ山形も変わってきています。

【川口】キムさん、雪あかりのボランティアをしてどう？毎年、楽しみが増えるとか。

【韓国・キム】毎年、レベルが成長している気がして、自分も一緒に作りますけど完成した作品は私が最初に来て作ったものより素晴らしいものが毎年、新しく出来る姿をみて、ちょっと自慢というか嬉しいです。

【川口】蠟で作ったやつとか今年ありましたよね。あれ3年前にあった？

【韓国・キム】韓国ボランティアが作ったのは全部雪なんですけど、他のボランティアの方が作ったものですよ。

【川口】雪あかりの路ってというか、小樽が好き？小樽に対してどう？

【韓国・キム】皆、私以外に全部のボランティアのメンバーも自分でお金出して来てるんですけども小樽とか、この雪あかりの路が好きじゃなかったらそんなに違わないんじゃないかと思っています。

【中国・スピン】最初、雪には充分感動しました。そしてまた、小樽とか雪あかりの路とか気になったことはいくつかあるんですよ。

日本の方のマナーとか色々なやり方とか、大変ためになります。来る前はあまり考えてなかったけど、着たら私達自身で感じられることがあります。例えば、最初に私達、雪像を作ったときに、万里の長城を雪で作ったとき、コーヒーを頂いたり、日本の人たちは親切な面を持っている。来る前には思わなかったんです。

【川口】雪で面白いことができた、プラス、人間と人間が仲良くできる。そういうことが出てくるね。人間のふれあいが出てきますね。

そこんとこ肘折温泉は仲間意識とか、来たお客さんとか、よくなったりしてるんですか？

【柿崎】肘折温泉というのはだいたい4,000人くらい。大蔵村が旧村なんですけども山形県で一番人口の少ない村で肘折温泉だけで50世帯、400人くらい。小さいとこ

るなんですけども、ここで2,000人の人を集めるイベントをするというのは、とてもとても、僕らだけではできなくて色々な人のお手伝いを頂いているんですけども、4キロに穴を掘るのも別の地区の人たちに手伝ってもらっています。さっきの芸工大さんとのお話もそうですし、秋田とか他の温泉の所と仲良くやったり、やまがた観光まちづくり塾という場では、県内ずっと住んでいたんですけど全然知らない人と繋がったり、こういう別府の甲斐さんというお師匠さんが出来たり、そういうちゃんと動いていると仲間が出来る。うちの奥さんは最近うちに来る人は変な人が多いと言っています。でも、そういうふうに行っていると繋がることできるな~とここ何年も感じておりました、こういう馬鹿なことをやっているという人たちとも仲良くなれると自分自身感じております。

【川口】志田さん、雪で旅籠を作る。それはそれだけかもしれないけれど写真を見ても、とても美しいですね。雪あかりの路の雪灯りもとてもきれいですよね。きれいなものもできるし、柿崎さんの話のように地域の人たちがとても仲良くできるんですね。

【志田】私達、月山志津温泉は全部が時間なんです。農家でもなく、宿同士、仲良い、悪いかは解りませんが、一つのものを作るということに我々若い人間が率先して、率先して雪あかりの旅籠をやろうと思ったんですけども、後押しをしてくれるのが、女将さんとか、社長さんとかになります。若い人が動けば自分の家を継ぐ息子、若女将がいるんですけど、未来のことを考えれば良い悪いことを抜きにして、志津地域一帯で団結力がここ2,3年でできたと思います。

大学生を呼んでボランティアとし雪あかりを作っているんですけども、始めは我々実行委員とボランティア実行委員と線引きがありました。3ヶ月間作業してこの雪旅籠を作るんですけども3ヵ月後には線がなくなってカッコイイことといえば雪旅籠マイスター

【川口】一つのことやることで人と人が繋がっていったということですよ。

ソンさん、感激したことってありますか？親切だと思ったこと、お客様と良い関係ができたと感じたことない？お客さんが声をかけてくれるでしょ？

【中国・スピン】あります。「お疲れさま」とか。あるボランティア用の食堂へ行ったらそこのお客さんがボランティアだと知って、食事がまだできないあいだにコーヒーとか饅頭を頂きました。他にも沢山、いただきました。天気は寒くても心は熱い。

【川口】韓国の方は雪が好き？どうしてどういうイメージで？

【韓国・キム】韓国では雪はロマンチックなイメージが強い。初雪があったら携帯で恋人とか友人に知らせたり必ず連絡します。ドラマとか雪のあるロマンチックシーンも沢山あるし、沢山積もることがないからその瞬間を大切に作るロマンチックさが好きなような、はかない一瞬を大切にする。

ジョンさんは済州島生まれで日本に36回来ているんだよね。ジョンさんは何故、そんなに日本が好きなの？



【韓国・ジョン】風景がとても美しく人が

やさしい。日本の様々な祭りが楽しい、温泉も体に良いし、食べ物の楽しみもある。道にスノーキャンドルを飾って一つ一つの灯りを見ながら、それを楽しむだけでなく、日本人と韓国人、そして中国人と交流できるというのは心まで温かくなるような気がします。

【川口】富山黒部からも8人いらしています。

松野さん、どうですか？感想を1分。



【松野】黒部から来ました。昨日も雪あかり

りの作り方とか色々なことを勉強をさせて頂いて、多くの方がボランティアに参加しておられました。私どもも10年前に黒部まちづくり協議会が市民一人から始めるまちづくりをしようということで始めたのですが、なかなか広まらない。ところが小樽の皆さんはもう国外まで広がって、ボランティアの輪が広がって、山形の皆さんがたも、もの凄く広がってる。そういうのを今、勉強させていただいた気がします。でもまだ頭が解らないです。もっと何か、感動をどうやったら皆さんのように力を呼び寄せることが出来るのか、教えててください。

【川口】ごちゃ混ぜの鍋のようなシンポジウムでございましたけれど、あったかいお鍋でした。今日のテーマ、マイナスをプラスにする観光地域づくり、繋がろう、人と人を繋げようじゃないかということのを皆で確認しようというテーマだったと思います。

ちなみに雪というのがマイナスだったとすれば、雪を形にして光を入れるだけで美しくなる、美しいものになる。美しいものは人と人を繋げるし、仲良くさせてくれる。それからこういう雪あかりのみちをやれば、人、雪だるまであったり、雪旅籠であったり、ゲレンデの上にお風呂を作る。そういったものを一緒にやるというだけで人が繋がる。また韓国や中国の人、外国の人とも心が繋がる。一番大事なのが心が繋がる

ことですね。キムさんの話しでは雪は素敵なものだ、柿崎さんは片付けるものだと言ったけれど、嫌だ嫌だといったものにロマンティックさだとか物語とかがある。そういうふうにマイナスを見るというのが、今日うかがった話だと思います。(一部終了)

第二部

「雪国の寒さをプラスに変える、マイナスをプラスに変える知恵を活かした観光地づくり」



【本保】わりあい早く到着したんですが出る飛行機が飛び立ってない状態で有りまして機内に2時間ぐらい閉じ込められておりました。あまり退屈はしないで時間は楽しんでいました。時間が経てば経つほど、川口さんが苦しんでいるだろうなと思いつつ、何考えてどうしようとしてるのかかと思っておりました。



【桑野】今日は由布院は氷点下だったんですけども雪がパラパラという程度で積もっていません。ですから空港へ着いた途端、雪をみて嬉しくなっちゃいました。雪って皆を幸せにするんですよ。これ大雨だったら悲しんでますよ。でも雪だったらどうしようとワクワク感ってなんだろうと楽しんでしまいました。

【川口】洞爺湖サミットが近々、行われますが、本保さん、観光の親玉ですから洞爺湖サミットの観光における意味なんてそこらへんの話をお願いします。

【本保】7月7日から洞爺湖でサミットが開かれまして、G8、中国、インド、アメリカ・・・首のうが集う以上に各国のマスコミの方が来られて、こういう方々を通じて世界中にニュースを流される。内外合わせて4,000人くらいの方が来る。そのマスコミの方々にとって北海道を知っている人は結構いると思いますけど、洞爺湖を知っている人は限りなく世界的に少ない。サミットの会場というだけで、洞爺湖を知らせられる、こういう機会を利用して、北海道、洞爺湖の良さを知らせようと。ちなみに日本では沖縄で2,000年、だいが昔ですが、メキシコ・カンクンとやっている

んですが、この両方がサミットをやって観光大成功した。

【川口】洞爺湖って有名じゃないですよ。北海道は有名だと思ってよいと思います。本保さんは洞爺湖サミットとか色々関わりを持っていますが、一方で日本へ外国のお客様を呼び込もうとやっていますが、活動、キャンペーンをやっていますが、甲斐さんのお客様をお呼びするセールスマン、それには体はってやっているんですよ。洞爺湖は知られてないけれど、北海道は知られているといわれていますが、そもそも日本って外国人にとってどうですか？有名、行ってみたいと思うんですか？甲斐さんはどこでも歩いて色々な人と接しておられるから。



【甲斐】基本的にはトヨタさん、ソニー、

パナソニック、富士山、芸者とかというイメージが非常に強い。先ほど外国の方がおっしゃってましたけど、東アジアの人は来てみて味わってみて、日本人の優しさに気づいたという話しをします。来る前のイメージは全体として観光よりも工業国というか物づくりの国のイメージ。品物がたくさん出てるんで作るのが好きだとそんな風に。

【川口】フランス人は日本に来たがるんですか？

【本保】確かに、工業国というイメージが強いと思うんですが一方では、トヨタとかソニーとかの名前が出ましたけど、トヨタ、ソニーが日本国メーカーと知ってる人は少ない、トヨタもソニーもパナソニックも世界的なブランドではありますが、日本なのかアメリカなのかはほとんど知らない。日本は世界的にイメージアップしている。自分が観光の商売をやっているから宣伝するわけじゃないけど、たとえばクールジャパンという言葉はアメリカでも、ヨーロッパでもアジアでも、非常に知られている言葉でファッションとかグルメとかあいうものがポップなカルチャーしかもデープなものということで高い関心と呼んでるんですね。Cool = カッコイイというんです。

【川口】日本ってものづくりでカッコイイ。カッコイイが観光と繋がっているかどうかでしょうか？

【本保】クールジャパンで来てる方が多いですね。トラディショナルな伝統的な京都とか奈良の魅力。そういうものが素晴らしいと思ってる人はいっぱいいますけれども日本の新しい文化、他の国ではちょっと考えられないような文化的な面白さに関心を持ってる人は多いですね。たとえばロボットが沢山いますね。徹底的に凝って作ってしまう。ほとんど普通の人間と変わらないようなロボットを作っちゃう。アシモのようなこういうこだわりの文化ってありますよね。これが面白いらしいですね。

【川口】桑野さん、今のお話を聞いてこだわりとか Cool って、桑野さんも外国、色んな所へ行ってみて、桑野さんからみて外国からのイメージって？

【桑野】この数年でかわってきています。日本の食にたいする憧れをすごく海外で持ってらっしゃる方が増えて、食の世界で和食のお店がただ和食ってくりでなくて、そこにちゃんと顔がみえて、お料理も日本の私達が感じる以上に、海外では基本に返っている。そういう当たり前のことが、今の日本で減ってるけれど、そういうことが海外では流行っている。海外から向けられている目は、日本の確かなもの、安心だけではなく日本の歴史だけじゃなく、そういうことを解ってる人たちがわかっているなりの良い仕事をしている。そこを（海外は）評価しているんだと思います。

【川口】大分県も別府もそうなんだけど、外国のお客様もいらっしゃるでしょ？

【桑野】世界的に誇る別府温泉がありますから、その隣が奥別府。由布院も個人旅行の方たちが特に東アジアの連泊の方、日本人よりお休みが取りやすいですよ。旧正月で。そういう方たちがこの1,2年は年々増えているんです。旅上手。自分達で組み立てる。由布院なんて田舎ですよ。12,000人の小さな町にどっから情報をとってくるのってくらいいらしているんです。

【川口】どこを魅力ってお客さん言ってます？

【桑野】日本人よりも滞在時間を多くとって楽しんでるんですね。楽しむってのがイベント参加とか、そういうのだけじゃなく、自分達で町を歩いて自分なりに時間を使っている。

【川口】楽しむ環境ってあるんですか？

【桑野】ただの田舎なんですけど、田舎を上手に使えるのは凄いな~と思います。

【川口】田舎を上手に使うって日本人たちは不器用ですよ

別府って90年代だいぶ落ち込んだんですよ？それが今、最近じわじわと復活してきています。そこらへんの秘訣というか理由は？数字、挙がってきているんですよ。

【甲斐】「もうダメだ！」と言われておりましたが、今、非常にいいのは、自分たちがしてきたことと時代が合う。僕たちはお客様に媚びてもいないし、受け入れたお客様に媚びへつらうこともないし、自然な形でやって好んでもらった。外国人を含めて366万人くらい宿泊がありますけど12万3千人の町なので、そういう時代になってきましたので、やり易くなった。

【川口】別府って昔は旅館があって、泊ってもらって、食事してもらって大量生産的になっていたのが、今きめ細やかになってきたんじゃないでしょうかね。

【甲斐】ここ10年、15年くらいで人が出てきたんで、色々な人が出てきたんで町づくりをする人材が出てきた。

別府にはまちづくりはなかった、まちづくりって由布院であったり、大山さんであったり。外から来るお客さんだけを相手にして町のことはあまりしなく、来るお客さんだけ相手にやっていた。だから当然、ドーンと落ちちゃった。今、まちづくりをやるようになって、別府も名前が出るようになってきた。

町歩きは月に7つ。夕暮れ散策、別府に8湯あるんですが7つで町歩きをやっているんですが、地元の人も、外からの人も泊まって何かを見るって時代じゃないので、泊まった後町歩きに参加して、職業ガイドじゃないボランティアの働いてる現役が案内する。そこでお友達になる。参加者同士、ガイドさんと地元の人たちがお友達になる。ネット時代なので集まって来ていただける。

【川口】町の人が町歩きをやって、その繋がりができて、町の魅力再発見というものあるでしょうね。

由布院はいまでこそメジャーな由布院ですけども、今も続いていますけども、牛食い祭りとか、いじましいことやっていたんですよ。今も続いていますけどもう何年くらいなるんでしょうか？

【桑野】33年くらいなるんですけど、由布院という名前をまだ皆さんが初めて聞かれたのは昭和40年代の後半じゃないかと思います。51年くらいには初めて旅行雑誌などに紹介される、たった30年なんですね。その間に由布院のイベントってのは、今って頂いた牛食い絶叫大会とか、映画祭、音楽祭、何にもホールもないところで何一つ立派なものはないんですけど、皆で手作りであた、ただやってくるんです。でも、ただただやり続けているとその間に人と人と繋がっていきまうし、応援団も増えてくるし、地道なことですけどこれに勝るものはないというのが自分の町なのかなと。

【川口】今日のお客さん、どれほど由布院を知ってるか知らないけど、由布院へ行ったことある人ちょっと手を上げていただけますか？

由布院で30年、戦後ね、田圃の中にお湯沸いちゃって米作れね～そんなところから始まったんですよ？

【桑野】私は1964年生まれなんですね。でも10年くらい前、ダムにしようって言ってたんですよ。これはダムにぴったりな地形だ。でも、ダムにしようと言った町って決して豊かじゃないってことは解っていると思うんですよ。でもそのあと、10年、20年、30年、人と人との交流、交流人口してたので由布院は人口減らなかつたんですよ。今までの一万人くらいの町って急激に減るじゃないですか、減らなかつたってのは、やっぱり交流してきたってこと大きかつたと思うんです。

【川口】30年という話しありましたが、たった30年ですよという、言ったんですけど30年かかつたんですよ。何故、そんな言い方するかということ、まちづくりだとか、1年や2年でね、うしろに黒部町づくりの方いますが、2年くらいで何とかならないかなと言うわけだ。もうせつかちなんだよね。

で、議論して30年、色んなことやって今なんですよ。

【桑野】父たちの世代が抱えている問題が、30年経っても今の私達の問題なんですよ。人が代わるだけで、抱えている問題って、そんなにすぐに解決できないんじゃないですか。

まして、私たちの町は小規模で、環境を大事にしないと、環境なんて100年くらいかかるので、でも1日でも諦めたらすぐに大きなダムに潰されてしまうという中で、そういうような状況です。

【川口】だから、とても大きな話しではなく、甲斐さんの町巡りでもそうなんですけど、桑野さんの町もそうなんですけど、とても小さなことを積み重ね、積み重ねしていく。で、僕、面白いな～と思うんですけど、それが国際的になっちゃうんですよ。こまく、こまく積み合わせ、積み重ね、それから甲斐さんのお話しによると、町の中で町歩きしている。こんなものが一体、外で・・・

それが積み重なっていくと繋がっていくんですよ。

本保さん、こちらへんの話し聞いてね、海外の人ばかりじゃなくて、国内にもいってないですか。海外に Cool だと言われているが、なんで国内に響かないですか？ どういう理由なんですかね？

【本保】海外の人はやっと日本を知り始めた。今まで知らなかった。魅力を発見して来るようになった。国内の人は散々見てきてしまって、ろくでもないと思ってる人がけっこう沢山いる。大雑把にいうとこういうことじゃないかと思っています。質問がずれちゃいますけど、今、町づくりの話をしてましたけど、何をもって、どこをみて町づくりを語っているかというのが結構、大事で、大きく分けちゃうとハードとソフトということありますよね。あるいは、景観を含めて目でみる形でハードと、それを支えるソフトとあるんですが、実は桑野さんの由布院と甲斐さんの別府を比べると、ハードがポイントなのか、ソフトがポイントなのかと、わりと明確に見えてくるんじゃないかと思うんですよ。由布院は30数年前は本当に単なる田舎で、今でもほとんど田舎の風情を残している町ですよ。それから甲斐さんの別府は昔から大観光地で大変素晴らしい景観に恵まれていますけど町並をみると、正直行ってびっくりする町並の部分がある。そうすると両方、共通しているのはハードとしてのそんなに美しい景観はあるんですが、傑出したものがあるかということ、たぶん外国の素晴らしい町に比べたら無いといえる感があると思います。

但し、由布院の名誉のためにいえば、大変な努力をしてきて景観を維持されているんですが、これが多くのお客さんが知っていることは間違いないと思うんですけども、でもそれ以上でもそれ以下でもない。

じゃ、その中で何故、由布院は成功し、甲斐さんの別府が8年から10年経ったと思うんですが、元気を取り戻してきたのかということ、その間にハコとかそんな変わっていないんですよ。変わったのは人と活動、もっというと専門用語でいえば、ホスピタリティが変わったんですよ。一生懸命、きめ細かいという言葉がありますけれど、きめ細かく人の相手をする仕組みが作られていったかどうかということがポイントだと思っています。まちづくりってそこを見なとできないし、逆にソフトは時間、かかるんですよ。10年とか20年とか。

【川口】ハードを作ると時間ともう一つ、お金がかかりますよね。由布院は人がタダでやるからとか言うんじゃないんですが、実はそういう土地ですよ。返ってきた汗とか時間を換算した場合。だから、30年かかったら計算すればもしかしたら、ハードよりもお金かかっていますよね。で、私はかかるんだから一生懸命やるべきだ。かかるのに軽視している。

甲斐さんは人材が出てきた。それがソフトの芽生えのポイントでしょうね。そういった意味では人材を得てきた。由布院というのは人材が出て、それが今、引き継がれてきているんですね。そういうことで、先ほど国内のことをそういうソフトの積み重ねが海外に映るんだろう。よく見えてくるんだろうというのが謎、神秘的ですね。だって、ハードってのは来ればわかるわけじゃないですか。パッとみれば。でもソフトってのはホスピタリティという目に見えないものはちゃんとあって、ちゃんとアピールできるって、不思議ですね。

【本保】これはちょっと桑野さんに聞いてみないといけないんですけども、日本のホ

スピタリティが本当に海外にアピールしてるか、どうか聞かれるとあんまり自信ないですよね。そこまでまだ充分知られていない。まだまだうしろ追っかけないとならない所があって何とかホスピタリティも上がってきている。これが現状でたとえば、此処に来ている甲斐さんはヨウコソジャパンというキャンペーンをやっているんですが、その先駆的なことをやってもらえたんで、先日ヨウコソジャパン大使になって頂いたんですけども、これを一生懸命受け入れる、きめ細かいおもてなしをするために努力した人を顕彰するっていったら偉そうなんですけど、とにかく仲間になって頂いて、これから一緒に仕事していこうよということにしてるんですけど、そういうことが広がるかどうか。根っこがあるかどうかポイントだと思うんですね。小樽について喋りたいことありますが、それはあとで。

【川口】桑野さん、本保さんの話でだいぶ賛成することあるでしょうね。

【桑野】ホスピタリティの話、まだまだ疑問の中でのいるのは自分も現場に居て思うのですが、一昔前までは人を迎えるということは地域の一部の人だったと思うんですね。観光関係者がまずお迎えしていた。でもそれだったら何にも迎えるじゃないわけですよ。町全体で迎える、人を迎える喜び、人と繋がる、交流すると楽しいじゃないですか。だって、この会場にいる皆さんもこの小樽で色々な所で交流して何回目かの方いっぱいいますよね。都会じゃないところが地方の小さな村、町がやっぱり交流の場を作っていけるってことは地域の人たちにとって凄く自信になると思うんです。日本の至るところが自信を取り戻すうえで迎える気持ちになって今、覚えているってことはこの数年、確実になっているなと思いますし、どの県に行っても、どの地域にいつも色々な人が迎えてくれればそういうことの積み重ねによって日本はホスピタリティが上がっていくんじゃないかと思っているんですけど。

【川口】観光ホスピタリティとか観光って観光業者の方がお迎えするというのが今までの考え方だったけども、それ以外の町の人もお迎えするんだというのが今、おっしゃった、それが観光まちづくりですよ。実はそれを起こしていくのが大変なんじゃないですか？

【桑野】そこが起らないと何も変わらないと思うんです。

【川口】抽象的にいえば、観光まちづくりが大事だといえる。皆ね。

最近の町づくりの全国でやってる人のおおかたの人は頭でっかちだから「観光まちづくりだ！」「都市観光だ！」と言うんですが課題として観光まちづくりを起こしていくのが重要で難しいことでしょう。

【桑野】先ほどの川口さんじゃないですが、私達って人にはお金かけないじゃないですか。でも人にはお金をかけないといけないんですよ。絶対に。

何もしなかったら人は育っていかないので、特に観光まちづくりにおいては、色々な地域でもっともっとそれが主役になっていいんじゃないかと。

【川口】人を育てるという抽象的な話なんだけど何十年人を育ててきたんですよ。町ぞだてということ一つ。甲斐さんだってそうですよね。町ぞだてってということ、人ぞだてしましたよね。今もしていますけど。

【甲斐】桑野さんの補足になる。少し前はそれを解らないで喋ってました。

今は・・・何故、日本人は人を誉めないのか？

(「ニソンミン・・・、韓国ボランティアに韓国語で話す」)

今、思いだしたのは、なぜ日本人は誉めないのか？今のは全部、誉め言葉ですよ。誉め言葉を聞くと誰だってニコッと笑ってくれる。日本人には「肌が白いですね」と言ったら、なにこの人、気持ち悪い、なんの魂胆があって誉めるの？って思うんですよ。私はエレベーターで背が高い女性と会って背が高くて羨ましいです。素敵ですねって言うんです。全然知らない人に。そしたらその女性は本当は高いヒールを履きたいの。でも、仕方ないから私はいつも低いのって。全然知らない僕でも話す。だから日本人は誉められることに少し慣れるべきだし、人を誉めることにも慣れるべきで。人を誉めるってことは良いところを見たいってことなのです。僕に背が高くてカッコイイねって言ったら私は怒るんですよ。

適切なことをね。可愛いか少しホワンとしてるとか、優しそうとかね。そういうことを言ってくると嬉しいわけです。だから、さっき言ったように国内が伸びなかったのはね、そういうことを、日本人が人を誉めるという努力を、やっとまとまりました、これをしなきゃ海外にでて皆から喜んでもらうのにね。何故、日本は上手くいかないかねと思ったのはこれだったんです。

【川口】誉めるということをどう転じるかというのをね。最後の方で展開して頂いたんですけど、今回の問題であるマイナスをプラスにするってのはねマイナスをマイナスとしていて、嫌なとこばかり言っていることは微笑が回ってこない。微笑が出ないですよ。マイナスをマイナスとしてやってる限りプラスになっていかないでしょうからその具体的なヒントとしては誉める。

【本保】今日、こういうなかなか良い話しを区切りに、二番に持ってくるのはいいですね。ぐっとくると思いました。いいところを誉めるってことですよ。さっき桑野さんがこちらに着いて、雪が綺麗でいいわねって、まさにそういう話なんじゃないでしょうか。違った角度、離れていては解らないマイナスをプラスに転じるってことですが、マイナスは常にマイナスだと思うんですよ。その人にとっては見方を変える、立場を変えるならプラスになるということ。たとえば小樽の雪の美しさ、今回来られてる中国の方、韓国の方、皆そう思っているんじゃないかと思うんですよ。どうですか？雪きれいでしょ？でも住んでるとたまらなく嫌なことなんですよ。市長だって除雪費かかるな～って頭の痛いことですから。

【川口】今の話で一番わかったのは、市長が雪を見ると除雪費しか浮かばない、ロマンチックじゃないな～(笑)

桑野さんが着いて私のところへメールを送ってきて「わあ～雪きれい」ってメール送ってきて、こっちは「おい、いつ着くんだ」「どうすんだ」と必死になってる時にふわっとくるね。実をいうと半分くらい気分が和むんだよね。この和み方、そういった意味で桑野さんは歩くホスピタリティですよ。

【桑野】旅先は時間の流れ、違うじゃないですか。ですから色々なことがあると良い方へ動きますよね。雪のおかげで皆さんとの関係も濃くなって来るし、雪を改めて言葉で語れるっていいじゃないですか。先ほどロマンチックとか色々な言葉を聞かされると桜をこんなに語る国民なのに雪を語ってないと思うんですよ。もっと雪を語れるんじゃないかと。

【川口】韓国の方にもちょっとうかがって、雪はロマンチック、皆さんがいらっしゃる前に初雪が降ってくると初恋の思い出とかね、すぐ融けてしまうそのはかなさという目で見て美しい、ロマンチックに見るという感性の差、そういう物の見方、こういう気持ちの余裕、忘れてますよね。そういう気持ち、そういう感性がね、ちょっと大げさなことという高度成長期に失われてますよね。僕はそう思ってたけど、失われてしまったものを取り直せるくらい、ある種心のゆとりが出来たんだから、そういうふうに文化を向けていったのはあるんじゃないでしょうか。

【本保】ゆとりというか愛情かも知れませんが陣内さんというだいぶお年のイタリアの都を書かかかっている先生がいらっしゃるんですが、いつも思わせるのはイタリアって凄いなと。でも陣内さんは、凄いなのはイタリア人が自分の町が最高だと思って言うんだ、と。確かに一つ、一つ小さな町、特色あって・・・多いですけども別のところから生まれてくるというのがあると思うんですね。愛郷心あるいは愛着、愛情。こういうことがどう発言されていくかということだと思っんです。

雪あかりの町も先ほどから申し上げて恐縮ですけども、小樽がだいじ、なんとかしたいという気持ちから出発してなんとか今、目の前の形だと思っんですよね。そういう気持ちの伝わりができるからこそ、こういったかたちで中国や韓国の方がボランティアでおいで頂けるところまで来たのではないかと思ったりしているのですが。

【川口】フランスをカンパニューというイタリアではカンパニアン、教会の鐘が鳴る、聞こえる音が、範囲が私の町。それでカンパニアンという陣内先生のイタリアの話がでておりましたが、言葉がありますよね。町の広さよりも音が、町の鐘の音が聞こえる範囲内が中外というところから出てきた言葉だし、今も本保さんがおっしゃった我が町の代表人、ベルアエイゼという言葉があつてね、美しき我が町って国なんだけどイタリア語でいうと、ふるさと、愛郷心、美しきわが町そういう言葉があるってことがそういう意識があるってことですよ。それをもう1回思い起こす。

桑野さんと時々メールを交換させて頂いてると　の花が咲きました、とかね、毎々季節の言葉にとっても愛着がある。桑野さん、好きなんですよ。

【桑野】自分の町ですよ。好きに暮らして、朝起きて、由布岳見て、毎日違うわけじゃないですか。庭見ても違うし、風も違うし光も違う。それを伝えたいと思っんです。自分の町だったら絶対思うと思っんです。

【川口】それでね、本保さん。今日は審議官という国の偉いお役目で来たのよりもたまに故郷に帰りたいな～と、気持ちが八割くらいで小樽に生まれて小樽の雪あかりの道、本保さんにとってはベルアエイゼですよ。これに対して今までの思い出で結構ですから何か思いをこういう機会に市民の方もいっぱいいらっしゃるし、なにか一つないでいただけると。

【本保】高校卒業して小樽を離れて40年になるんですけども、それでも小樽のことは美しいなと思ってるんですよ。四季折々の変化が、雪も含めてね、未だにいいな～と、いつ帰ってもいいな～と思っんですよ。緑も美しいし、田舎も美しいし、今日ここに仲間のいますけど、懐かしい昔の仲間がいて、小樽帰ってきて、最高だな～と思っんです。それが多分、郷里なんじゃないかと思っっていますけれども。

ま、一方で経済の状況、どっちかという苦しい状態が続いていて、高齢化もそうで

すけども、全国で一番進んでしまっているところがあるところですけども、でもこ
だけ、いいものを持って町、それと同時に小樽市民として生まれて大変誇らしいし、
嬉しいのは全国どこへ行っても小樽って皆、知ってるんですよ。説明しなくて済む。
これ本当に誇らしい。

そういう中で雪あかりのみちみたいな形で新しい動きがあるというのは私自身嬉しく
て、雪あかりも10回目ですけど、毎回、回を重ねるごとに良いものになっているん
ですが、今回お伺いして一番嬉しいし感動したのは、此処にいる皆さんをお迎えして
いることなんですね。さっきから人づくりがまちづくりのポイントだということと言
われていますけども、やっと10年かかって外国からのボランティアの方にもおいで
いただけるし、こうして山形や黒部からも人がくるって交流の町ができるのは小樽が
よっぽど豊か、人の輪ができて良い基盤が出来てきたと思ってるんですが。もっと大
きく広がった人の輪ができて喜んでるんですが。

【川口】小樽に来ちゃうと、すぐに素に戻っちゃう。小樽ってそういう町。私が小樽
が好きだからどうしてもついフラフラッとまずは一杯飲んで、泊まって帰る。この間、
ホテルに泊まったら12月に泊まった川口様ですね。と言われてびっくりしました。
この町じゃ悪さはできないと心配しましたけども、そういうよそ者もそう思えるんだ
よね。桑野さんは随分、小樽へいらっしゃって雪あかりに対してどういう印象？

【桑野】そういう気持ちにさせるのが小樽なんですよ。

私、数年前に雪あかりで小樽伺って初めての経験だったんですね。夜道が明るいんだ、
雪って明るいんだって。何か私達が忘れていた感、自分の中にあるものが浮かび上
ってくるんです。記憶を含めてなんです。そういうような特別な場所なんだ、小樽は。
小樽の雪あかりの中にいると過去も未来も何か繋がっていく、何か神秘的な世界を生
み出しているということを感じたので、そのあと4年か5年経っているんですが、
大分県でも竹の灯りをやっているんですね。大分は雪が無いんですが竹が多い県です
ので竹を2万本くらい切って色々な城下町でローソクの灯で夜道を照らすんですけど
それを見て、全部連想するのが小樽なんですよ。小樽のゆきあかりが、人間って非常
に鮮明に残る記憶場面があると思うんですが、そういうところを作り出せる力がこの
小樽にあるんだと思います。これは何処の町にもあるものじゃなくて、凄い力だと思
いますし、そういう美しさを持ち得ていること、最大限に生かしていることによって
皆さんが気づいていくというのが非常に小樽の役割って大きんじゃないかと思ってい
ます。

【川口】具体的に何だといわれても、具体的に何だといっても困っちゃうんだけど魔力
があるんですよね。なにか気づかされちゃうようなね。昨日もちょっと話してて、こ
んな寒くてね、もう少し経つと春が来るよって。小樽って山で囲まれて、山の稜線か
ら青空がきて白い雲がポッと浮かんでね。伊藤整の詩集に出てくる「ふわり、ふわり」
という詩があって、あれそのまんまなんですよ。で、こういう他にはないものがい
っぱい積み重なって魔力が出来上がった。

【桑野】ボランティアの方、前回も歩いている時にお目にかかって、その時は韓国
の方中心だったんですけど、雪の器、空間の中で繋がってっていることを雪あかりで感
じるんですが、何もしない自然の力じゃなく、人間が絶えず入り込んでいる。綺麗に

感じあえると、そういうものの積み重ねで進化してるからいいんですよ。小樽が進化してなかったら今日、泊まってない。今日、駅に着いたら駅に匂いがあるんですよ。その匂いは赤ワインの匂いがふわっと駅の中に。赤ワインとがうんぬんより温かく迎えてくれる伝わるわけですよ。これ数年前なかったんですよ。確実に変ってる。

【川口】本保さん、こういうの作るの一番難しいんだよね。あ～香ってくるってのがね。だから人の力なんですよ。

【桑野】確実に皆がやってらっしゃることがわかるんですよ。ただ旅人って敏感なので、どうやって迎えてくれるというのは、やはり言葉じゃないんですよ、迎えるって。言葉は勿論、大事ですよ。誉める言葉もちろん大事ですけど、やっぱりわかる、町に入ってきた瞬間。私は来たくてたまらなかったんですよ。今日飛行機が飛ばなくても絶対来ようと思いましたが。

【甲斐】小樽は2度目なんですけども私は母親が82歳になりますけど、母親と昔、一緒に来たことがありますして、ここでオルゴールを買って。82歳くらいの年代の母親ってのはせっかく買ってもちょうど大切にとっておいて、使って欲しいんだけど、本当に、本当に大切にとって取って使わないだったらね、使わないのって。使わないかたちできちんと置いて置くことが好きなんです。

時代によって色々な考え方があると思いますが、母親にとってはオルゴールを通して息子と行った思い出がず～と思い出の中にあるんですね。だから今日、来るときに小樽へ行ってきますよと話したら非常に本には喜んでいましたけども、やはり、そういうところで、さっき僕が言ったように職場とかで男性を誉めたり、女性を誉めたり。誉めるって難しいです。相手のよいところを自分が触媒となって引き出すということです。誉めるという言葉は上に塗るといふんじゃないしに引き出すということなんで、そうするとそういう引き出しきるようになると、ほとんど朝、挨拶さえしないまま動いているのに、そうじゃないのに、何にも見ていないのに髪形が変わったとか、少し切ったとか、栗色になったとか、自然にわかるということがそういう面の感性なんですよ。

小樽さんはそういうのをお持ちの町なんで、是非そこらへんをもっともっと発信していただければ、本保さんもいらっしゃいますし、本保さんのいる間にですね、お墓に入ったあとにあの人は立派な人だ日本人は言うんですから。居なくなったら誉めるんですから。いなくなったあと、あの人は立派な人だということです。日本人の性格には嫌気がさします。居なくなったら誉めるんですから。

【川口】普通、シンポジウムではしないんですけど、今日はいらっしゃるので最後に一言ずつ。普通やらないのですが、今日は市長がいらっしゃってますので、市長に何か一言いっておきたいこと「市長にひとこと！」

【桑野】雪あかり以外の小樽知らないんです。市長。

知らない小樽、やはり雪あかりと繋がっている小樽であってほしいと思ってますし、自分が由布院の町に住んでいまして非常にイメージと違うってことをいつも言われるんですね。小樽は雪あかりのイメージが小樽じゃないといけないと思っているので是非、365日のうちの雪かりじゃない小樽も見せて、聞かせて頂きたい。

【甲斐】言いたいことは一言なんですけど、外国人が22万人ってをリサーチしまし

た。25万人のうちの22万来ると聞きました。全部とはいませんが小樽から小樽だけで、聞くと上半期で締めて4月のものを12月くらいにデーターを出しているそうなので今、別府では1ヵ月ごとにデーターを出してますから小樽にどの外国人がおみえに、今日来た外国人もそうですけどもそれを1ヶ月ごとに小樽は数字を出すと今、私達は国と一緒に、ようこそ大使の仕事の方が最初の一つはそれだろうと思っています。日本人は統計いかにかにも曖昧で、極端に嘘。嘘ってのは対象をはっきり言わないでいくら来たよ～、うちはいくら多いよ～って全国でやってますから、だから是非、1ヶ月後に出せる統計を小樽から始めて頂ければと思っています。

【本保】まず申し上げたいのは、小川原さんをはじめとして、この催しをやって下さってる皆様に心からお礼を申し上げ、また敬意を表したいと思います。

本当に素晴らしいお祭りを10年間続けてきて頂きましてありがとうございます。

最大の成果が、此処にいらっしゃる方々の存在で表れていると思っています。

北海道、特に小樽は外国人のお客さんをまだまだ沢山呼べるとしています。

大いに力があります。

数字間違ったらここに仲間の熱田さんが北海道で苦労されているんで、直して欲しいと思います。北海道には道外から約600万人訪れます。そのうち外国人のお客様は約1割、59万人ちょっとです。経済的には26%の消費が外国人のお客さんで、もの凄く大きなインパクトを持っています。で、特にアジアにとっては北海道の風景、これは無い風景です。雪はまったく無いことが多いし、あってもそうとう違った姿でしか存在してない。したがって冬のシーズンも含め、たいへん大きなポテンシャルを持っています。であるからこそ、こうして此処にいらっしゃる若い方が関心を持ち、おいで頂いてるんでしょし、大変素晴らしい可能性があると思っていますが可能性のみだけでは絶対に上手いかないということもまた事実なんで、2つどうしてもやらなきゃいけないことがある。

一つはさっきから川口さんも来てみたら思ったよりずっといいとこだったでしょう、と言われておりますが、まったくその通りなんですけども、裏をかえせば、宣伝が足りない、冒頭洞爺湖サミットを使ってどうするかということがありますけどももっと知ってもらう、それも良い所をどうやって知ってもらうかというところを努力していかなくてはいけないんで、甲斐さんはようこそジャパン大使ですけども、今日お迎えしているボランティアの方々は全員、小樽大使でこれからそれぞれの国で宣伝してくれると思いますので是非、大事にしてお返ししていただきたいとこれが一つ。

もう一つはですね。実はホスピタリティ。桑野さんがおっしゃったように駅を降りた瞬間にヴァンショーでお迎えされる、嬉しいことですね。これが駅降りてからだけじゃなくて実際に、滞在して、帰ってくる。帰ってから振り返ってみて小樽は非常にきめ細やかな、もっと言うと人間的な会話があったなと、こういう思い出をどれだけ作れるかということが非常に大事だと思っています。

ちなみに北海道は平均レベルでいうとホスピタリティでいうと最下位であります。全国でも観光魅力とか行ってみたい統計取ると随分高いんですが、ホスピタリティは五流と言われておりますよね。そこを何とかしないといけませんね。

【川口】結構、きびしいですね。

桑野さんは雪あかりのみち以外の小樽を教えるってことでしたね。

甲斐さんは2ヵ月で数字をきっちり出せるそういうシステムを作ってほしい。

本保さんは皆さん、ありがとうといえるこの雪あかりの路って凄いな～、厳しい言葉ですが小樽をもっと知ってもらおう、もう一点はホスピタリティをもっと。二点、市長、いずれも難しい問題だと思いますが目標としては非常に重要なお三方のご意見でしたが

今日は雪国の寒さをプラスにかえる、マイナスをプラスに。こういうテーマで話したんですけども、雪国の「雪」まではあまり入りませんでした。実は意図的に「雪」については第一部で良い話がいっぱいでした。むしろマイナスをプラスにということでは話しを進めて参りました。

今日の話の中で甲斐さんが、マイナスをプラスに変える、抽象的なことを具体的にことを身近なことでいえばもっと自分とか人とか自分の町を誉めてみよう、こうおっしゃった、誉めるってことは何かというと引き出すんだ、引き出すんだという言葉が桑野さん流に言えば、もっとよそともっと交流する、よそと交流しないと引き出せない。そういうことをやるのが人材を育てることに繋がってくる、人なんだ、とこういうお話だったと思うんです。

こういう話でまとまるってことは、同じところに立ってるからなんですよ。

小樽に対する一つの同じ基盤に立っている。

そういう基盤を持っているってのは凄いな～と思います。

終了